

東京新聞 暮らすめいと

東京新聞読者の生活情報紙

お元気ですか

異端児

心臓パートⅣ

南淵 明宏 43

「入唐求法巡礼行記」をご存じでしょうか？

加藤周一氏によれば、本初の文学作品、と呼ぶべき大作ですが、最初に紹介したのはなんと外国人、E・ライシャワー氏です。「あれ？聞いたことあるぞ！」そうです。彼はアメリカ合衆国の駐日大使を務めた人でもあります。どんないきさつだったのか知りませんが、かの国では生え抜きの

役人より、実社会で活躍する人にどんな政治や行政の重職をまかせるようです。彼らの文化の違い、と言えはそれまでですが、現場で通用する人、という視点だと思えます。

一方、日本の外交はどう

やられっぱなし日本

国際会議

でしよう。日本の立場をしっかりと説明しなければならぬ国際会議の様子がテレビのニュースで映し出されるのですが、どのシーンでも日本の代表は目を伏せて英語の原稿を棒読みし

かも信じられないくらいド下手な発音というか、無感情、無表情、読経の様相です。「何かを伝えよう」という目的はみじんも感じられません。これでは国際会議で日本はやられっぱなし。国益よりも省益、出世、保

ことすら聴衆には理解できずじまい。一方、北京語での彼らのスピーチは秀逸でした。原稿なしで聴衆に語る口調でしっかりと主張しておられました。独特の甘美な抑揚も完璧でした。この違いはいったい何なのでしよう？ 円仁、空海、最澄、旻、悠久の交流のためもの、というべきなのでしょう。

身。さらに「巧言令色すくなし人事考課」ということで流ちょうに英語を話す人は彼らの世界では出世できないのでしょうか？

これまで私が実際に遭遇した彼らの英語のスピーチも、ひどいもの、大変にお気の毒でした。英語である



プロフィール

なぶち・あきひろ

奈良県立医科大学卒。シドニーセント・ビンセント病院、国立シンガポール大学病院などを経て、2010年12月から品川区の大崎病院東京ハートセンターのセンター長。医学博士。